「医学系（医学）」教育評価報告書

（平成１２年度着手　分野別教育評価）

岐阜大学医学部

平成１４年３月

大学評価・学位授与機構

◇　大学評価・学位授与機構が行う大学評価

○大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

１　評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は，大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう，大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより，①その教育研究活動等の改善に役立てるとともに，②評価結果を社会に公表することにより，公共的機関としての大学等の諸活動について，広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

２　評価の区分

機構の実施する評価は，平成１４年度中の着手までを段階的実施（試行）期間としており，今回報告する平成１２年度着手分については,以下の３区分で,記載のテーマ及び分野で実施した。

① 全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）
② 分野別教育評価（「理学系」,「医学系（医学)」）
③ 分野別研究評価（「理学系」,「医学系（医学)」）

３　目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は，大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう，当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため，大学等の設置の趣旨，歴史や伝統，人的・物的条件，地理的条件，将来計画などを考慮して，明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

○分野別教育評価「医学系（医学)」について

１　評価の対象組織及び内容

このたびの評価は，文部科学省から要請のあった６大学（以下「対象組織」という。）を対象に実施した。

評価は,対象組織の現在の教育活動等の状況について,原則として過去５年間の状況の分析を通じて，次に掲げる６項目の項目別評価により実施した。

1) アドミッション・ポリシー（学生受入方針）
2) 教育内容面での取組
3) 教育方法及び成績評価面での取組
4) 教育の達成状況
5) 学生に対する支援
6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

２　評価のプロセス

① 対象組織においては，機構の示す要項に基づき自己評価を行い，自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。
② 機構においては，専門委員会の下に評価チームを編成し，自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査の結果を踏まえ，その結果を専門委員会で取りまとめた上，大学評価委員会で評価結果を決定した。
③ 機構は，評価結果に対する意見の申立ての機会を設け，申立てがあった対象組織について，大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

３　本報告書の内容

「Ⅰ　対象組織の現況」及び「Ⅱ　教育目的及び目標」は，対象組織から提出された自己評価書から転載している。

「Ⅲ　評価結果」は，評価項目ごとに，特記すべき点を,「特色ある取組，優れた点」及び「改善を要する点，問題点等」として記述している。

また,「貢献（達成又は機能）の状況（水準)」として,以下の４種類の「水準をわかりやすく示す記述」を用いている。

・ 十分に貢献（達成又は機能）している。
・ おおむね貢献（達成又は機能）しているが，改善の余地もある。
・ ある程度貢献（達成又は機能）しているが，改善の必要がある。
・ 貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり),大幅な改善の必要がある。

なお，これらの水準は，当該対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり，相対比較することは意味を持たない。

また，総合的評価については，各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが，この評価に該当する事柄が得られなかったため，総合的評価としての記述は行わないこととした。

「Ⅳ　評価結果の概要」は，評価結果を要約して示したものである。

「Ⅴ　意見の申立て及びその対応」は，評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について，その内容とそれへの対応を示している。

４　本報告書の公表

本報告書は，対象組織及びその設置者に提供するとともに，広く社会に公表している。

Ⅰ　対象組織の現況

(1)学科名及び所在地

医学部医学科　　岐阜市司町４０番地

(2)学科構成（３６講座）

解剖学第一	内科学第一
解剖学第二	内科学第二
生理学第一	内科学第三
生理学第二	高齢医学
生化学	外科学第一
分子病態学	外科学第二
薬理学	産科婦人科学
病理学第一	整形外科学
病理学第二	脳神経外科学
微生物学	眼科学
衛生学	耳鼻咽喉科学
公衆衛生学	皮膚科学
法医学	泌尿器科学
寄生虫学	神経精神医学
ｽﾎﾟｰﾂ医・科学	小児科学
	放射線医学
	麻酔・蘇生学
	臨床検査医学
	口腔外科学
	東洋医学（ﾂﾑﾗ）（寄附講座）
	循環器再生医科学（ﾌｪﾛｰ）（寄附講座）

(3)学生総数　　４８９人

(4)教員総数　　２３１人

※教員総数には，附属反射研究施設，附属嫌気性菌実験施設，附属動物実験施設，附属病院，医学教育開発研究センター及び寄附講座を含み，看護学科を除く。

医学部は医学科と看護学科の２学科から成る。しかし，看護学科は平成１２年１０月に開設したばかりであり，また「自己評価実施要項」に医学の学問分野以外の学科は評価の対象から外すとあるので，ここでは，特に断らない限り，岐阜大学医学部とは岐阜大学医学部医学科のことを意味する。

(5)沿革及び地理的条件

岐阜大学医学部の歴史は，昭和１９年４月の岐阜県立女子医学専門学校開設にはじまる。昭和２２年６月岐阜県立医科大学，同２４年４月岐阜医工科大学，同２５年３月岐阜県立大学，同２５年４月岐阜県立医科大学医学部，同２７年４月岐阜県立大学医学部（新制設置），同２９年５月岐阜県立大学を岐阜県立医科大学に改称するなどの変遷を経てきたが，昭和３９年４月の国立移管により岐阜大学医学部となり現在に至っている。

岐阜県は我が国の中央に位置し，人口約２１０万人，面積約１０，６００㎢と，４７都道府県の平均的な規模であるが，濃尾平野にあって比較的都市化している美濃地方と，山林に囲まれた飛騨地方に大別される。医学科は，入学定員８０人，医学科（附属反射研究施設，附属嫌気性菌実験施設，附属動物実験施設，附属病院，医学教育開発研究センター及び寄附講座を含む）の教官定員２４１人（教授４１，助教授４５，講師４５，助手１１０）の小規模な学科ではあるが，岐阜県下唯一の医学科として，県内の平野部・山間部両地域の臨床各施設や行政組織からの要請を受けながら，地域で活躍できる医師の養成を目指してきた。また，国立大学としての役目を果たすべくさらに広い視野と立場で活躍できる医師の育成をも念頭に置いてきた。

(6)医学・医療をとりまく現況

近年の科学技術の進歩に伴う医学・医療の進歩並びに高齢化社会の到来や生活様式の変化に伴う疾病構造の変化は極めて大きい。加えて，国際社会における情報の量と速さの拡大は目覚ましい。さらに，患者の個人情報保護や医師患者関係におけるきめ細かな配慮が以前にもまして要求されるなど，医学教育に求められる質的・量的な変化には著しいものがある。すなわち，現在の我が国においては，このように多様化している社会的要請にこたえ得る人間性豊かで倫理観に富む良き医師，生涯学習の志向を身につけた医療人，多様な情報の渦巻く国際社会で活躍できる国際人の育成が求められている。

Ⅱ　教育目的及び目標

１．教育目的

医学科では，前述の経緯並びに我が国の医学・医療を取り巻く現況を踏まえ，学生が，将来保健医療に貢献し，医学の発展に寄与することができるよう卒業時に下記４項目を達成することをねらいとする。

①将来医学関係のいずれの領域に進む上にも必要な，基礎的知識と基本的技能を修得する。

②生涯にわたって発展させるべき，保健・医療の専門職に必要な基本的態度・習慣を身につける。

③医学的問題を正しくとらえ，自然科学的のみならず，社会的・心理的方法を統合して解決するための基本的能力を修得する。

④知識・技能・態度を自ら評価し，かつ自発的学習と修練によってそれらを向上し続ける習慣を身につける。

２．教育目標

前項で述べた教育目的を達成するため，次の諸点を具体的な目標としている。

1)問題解決能力の開発

医学・医療の進展に伴って，その専門化・細分化が進んでいるとともに医学の枠組みを越えた学際的な領域の重要性も増してきたため，必然的に多量の知識及び技術を修得する必要が生じてきている。このような目的を達成するために，プレテュトーリアルコースで基礎的な知識を集積させることを目標の一つに置いている。しかし，単なる知識及び技術を蓄積させることに偏ることなく，テュトーリアルコースを通じて問題解決能力を涵養し，かつ，医学・医療に対する総合的視野を育成する。

2)患者本位の医療実践の訓練

分子生物学・分子遺伝学をはじめとした医学周辺科学の著しい進展とそれらの医学・医療への導入によって，ややもすると技術優先の傾向が見られるが，心身両面からの包括的医学・医療を目指し，生命に対して深い畏敬の念を持ち，患者の立場に立って診療を行える人間性豊かな医師を育成する。すなわち医師としての倫理観の醸成を目標とし，特に人格形成に配慮する。具体的には，クリニカルクラークシップ型臨床実習（２４時間体制）の一部に模擬患者（標準患者）の協力を得ての面接訓練を導入し，また，訪問介護を体験実習させることにより，患者の立場に立って診療を行う態度を身につけさせる。合わせて，インフォームド・コンセントの取り方についての訓練を行う。

3)能動的学習の推進

医学・医療の進展に対して常時関心を寄せ，新しい知識・技術の適用に関する的確な判断力を培うため，生涯にわたって学習を継続していく習慣と，広く学際領域の関連諸科学にも常に向学心を持つ能動的態度を修得させる。

4)地域医療の重要性の認知

地域医療に関心を持たせ，医師は地域住民の疾病予防から社会復帰に至る医療全般に責任を有することを自覚させるとともに，地域医療の中で教育的役割を果たさなければならない場合のあることを理解させる。

5)国際化への対応力の養成

医学・医療の場における国際交流も急激に増加しており，また，開発途上国に対する国際医療協力の必要性も高まってきている。したがって，国際的にも活躍できる医師の育成のために，熱帯・亜熱帯に特有な疾病の知識を修得させるとともに，医学英語並びに一般英会話にも熟達させる。

Ⅲ　評価結果

１．アドミッション・ポリシー（学生受入方針）

ここでは，対象組織における「アドミッション・ポリシー（学生受入方針）」の策定及び周知・公表状況やその方針に沿った「学生受入の方策」の実施状況を評価し，特記すべき点を「特色ある取組，優れた点」，「改善を要する点，問題点等」として示し，教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

◇特色ある取組・優れた点

①アドミッション・ポリシーの策定については，医学部として，人間性豊かな医療人，生涯学習をする医療人の育成を目指し，そのためテュトーリアル教育(学生を主体とした自主学習的な教育方法)とクリニカル・クラークシップ(卒前臨床教育)を導入して教育をするという方針から，医学科に望ましい学生の資質を７項目掲げ，その受入の大前提に基づき，多様な入試を行うという一貫した内容になっている。また，受験生の高校における学習も併せて記載されており，教育目的及び目標を実現するため一貫した受入方針を策定している点が特に優れている。

②７項目にわたる受入学生の資質を，受験生を対象とした「岐阜大学案内」や「募集要項」に記載し，さらに「医学を志す皆さんへ」と題する学部紹介用の小冊子にも記載して公表している。積極的に学部の姿勢を受験生等に示している点は,学外への公表の面からみて優れている。

③夏休み期間中に近隣の高校生などを対象にしたオープンキャンパスを開催し，小冊子「医学を志す皆さんへ」を十数年にわたり配布している。オープンキャンパスには，毎年，岐阜県，愛知県を中心に１００名前後の参加があり，今年度は，１１５名でその内６２名が高校1,２年生の参加であった。また，オープンキャンパスに参加できなかった高校生や一般からの資料請求も多く，積極的に学部の姿勢を示している点は特色ある取組といえる。

④前期及び後期日程試験ではアドミッション・ポリシーの一つである基礎的な学力を中心に合否判定を行っており，推薦入試及び後期日程試験では小論文及び面接を課してアドミッション・ポリシーに相応しい学生を採用すべく努力している。推薦入試は平成２年度から始めたが，当初５名以内であった募集枠を平成５年度からは５名に，平成７年度からは１５名に増やし，相応しい学生を多く採るべく努力している。

◇改善を要する点・問題点等

①小冊子による公表などの手段を通じてどの程度アドミッション・ポリシーが理解されているかを知るための適切な手段を講じる必要がある。学生との面接調査において，アドミッション・ポリシーの内容を知らない学生やアドミッション・ポリシーの意味を理解していない学生も多数いたことから判断して，理解されているとは言い難い。

②それぞれの入学者選抜方法により，アドミッション・ポリシーに相応しい学生の選抜を行っているが，入学後の成績などによる追跡調査を行い，個々の入試の評価を進めることの検討が望まれる。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

２．教育内容面での取組

ここでは，対象組織における「教育課程及び授業の構成」が教育目的及び目標に照らして，十分実現できる内容であるかを評価し，特記すべき点を「特色ある取組，優れた点」,「改善を要する点，問題点等」として示し，教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

◇特色ある取組・優れた点

①全国の国立大学に先駆けて平成７年度にテュトーリアル教育を導入し，小グループに分かれた狭義のテュトーリアル教育に加え，学生が知識を整理し，かつ補完出来るように,教員による講義と演習・実習を適宜配置して,臨床実習が始まる前の２年半の間に，合計２０のコースを修得させる。これらのコースは，従来の講座の枠を越えて，一つの事象・症例を通じて，基礎から臨床，ひいては社会への応用にまで幅広く統合的に学習できるよう配慮しているなど教育目的及び目標の一つに掲げている問題解決能力を養うための方法として,特に優れている。また,学生からも大変好評で,岐阜大学医学部がテュトーリアル教育を行っているから受験したという学生も少なくない。

②授業の一貫として１年次及び５年次に合宿研修を実施している。１年次生の合宿はガイダンス的な意味合いが強いが，研修内容として医療・医学に関するテーマでディベートを行って論理的な思考の訓練を行うとともに，教官や仲間との触れ合いの場としている。５年次生の合宿では，医療に関するテーマでＫＪ法による研修や，模擬患者の協力を得ての面接訓練を行い，患者の立場に立って診療を行う態度を身につけさせるよう努めている点が優れている。

③医療情報教育として，１学年を３グループに分け，ワープロ，統計計算の他にパソコンを使ってのプレゼンテーションや今後必要となる電子カルテの教育まで実施しており，情報関連技術を医学・医療の分野に活用するために必要な基礎知識を学ばせる特色ある内容である。

④学外臨床実習を含め，クリニカルクラークシップ型の臨床実習に取組んでおり，年数回のセミナーに参加して研修を受けた模擬患者（ボランティア）の協力を得て面接訓練の実施や訪問介護を体験実習させることにより，患者の立場に立って診療を行う態度を身につけさせる参加型の臨床実習となっている点が特色ある取組である。

⑤プレテュトーリアルコースとして基礎知識を獲得させるため，入試で生物学を選択しなかった学生など生物学の知識に乏しい学生のために７つのセクションからなる「生命科学」の開講をはじめ「情報科学」,「医学英語」,「医用工学」,「医学のための統計学」を開講して，様々な授業によりその後のテュトーリアル教育など専門教育に入りやすい工夫がされたカリキュラムである。学生からも，高校で生物学を学んでいても生命科学の受講は無駄ではなかった，医学英語は役に立ったなど，基本事項の確認やこれから行う事項の指標として役立てている。

⑥２年次の初期体験実習Ⅱでは，学生を基礎・社会医学系の講座に配属し，各講座の研究内容にも触れることになり，常に向学心を持つ能動的学習態度を培う上で役立っている。
近年，基礎・社会医学系に進む卒業生が少なくなっているが，このプログラムを受けた学生の中に高学年まで同じ講座で研究を続け，後に国際学会で発表し，基礎講座の大学院へ進学した者もいる。

⑦テュトーリアル教育の導入に際しては，３０室に及ぶテュトーリアル室が必要となり，極めて狭隘なキャンパスで約１５㎡の３０室を捻出した。決して十分な広さではないが，現状の施設環境で必要な部屋を捻出し改善したことは評価できる点である。

◇改善を要する点・問題点等

①教材の改良などにより，これまで力を注いできたテュトーリアル教育をより優れたものにすることが望まれる。

◇貢献の現況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

３．教育方法及び成績評価面での取組

ここでは，対象組織における「教育方法及び成績評価法」が教育目的及び目標に照らして，適切であり，教育課程及び個々の授業の特性に合致したものであるかを評価し，特記すべき点を「特色ある取組，優れた点」，「改善を要する点，問題点等」として示し，教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

◇特色ある取組・優れた点

①教育方法の中心と位置付けているテュトーリアル教育について，カリキュラムに到達目標，方略，評価の三要素を取り入れ，シラバスにも一般目標，行動目標，総合評価として明示されており，学生からも１年間の計画がわかりやすく，十分活用しているとの声も多く，特色ある内容となっている。

②狭義のテュトーリアル（テュトーリアル・コアタイム），講義，実習・演習，自習が行われ，テュトーリアル・コアタイムには学生は約８名のグループに分かれて与えられた症例（課題）を基に検討しながら問題点を抽出する。抽出した問題点について各自が自習し，次回のコアタイムで学習内容を基に問題点の解決に向けて討論する。コアタイムと自学自習の間には，専門分野の教員による６０分単位の講義等をいくつか挿入して，課題に対する学生の理解が深まるよう支援している。また，テュトーリアルの指導教官に対しても，テューターガイドをコースごとに作成し，教育指導の向上と能率を高めている。

このように岐阜大学医学部独自の方法によるテュトーリアル教育の実施は，教育目標にもある問題解決能力を養うのみならず，能動的学習の推進をも促す，特に優れた教育方法である。

③成績評価法として，医学英語，生物学実習は筆記試験，初期体験実習Ｉ，医学概論，細胞生理Ｉはレポートによる評価，情報科学はコンピューターを使ってのレポートでの判定など多彩な方法で行うなど特色ある取組をしている。特に，テュトーリアルコースでは，テュトーリアル・コアタイムの８０％以上の出席を持ってコース終了時の総括試験の受験資格とし，筆記の総括試験を実施している。テューターがコアタイムでの学習態度も評価しており，提出されたレポートを含め，これらを参考に厳格な成績判定を行っている点は優れている。教官も，テュトーリアル教育を取り入れる前に比べ講義への出席率が向上していると感じている。

④すべてのテュトーリアルコースに合格した学生に対して，５年次に臨床実習を開始するに当たり，臨床基礎知識が十分であるかどうかを総合的に判定するため，臨床実習資格総合判定試験を実施している。試験問題は各講座から募り，マークシート方式を採用している。その際，個々の問題の正答率を一定の方法で検討し，不適切問題を除いて判定するなど，客観的並びに総合的な評価が行われるよう努めている点が特色のある取組である。

⑤平成13年度の合宿研修において，技能・態度教育の評価として，客観的臨床能力試験（ＯＳＣＥ）を実施するなど，新しい成績評価方法を積極的に導入する姿勢は評価できる。今年度試験を受けた学生からも好評であり，優れた方法といえる。

◇改善を要する点・問題点等

①学外臨床実習で学生毎に各病院の医師による１０項目による評価表と学生の自己評価表により評価を行っているが，学生個人の成績評価への利用や実習病院へ取りまとめた結果をフィードバックしていない。せっかく行っている評価の有効活用が望まれる。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

４．教育の達成状況

ここでは，対象組織における「学生が身につけた学力や育成された資質・能力の状況」や「卒業後の進路の状況」などから判断して，教育目的及び目標において意図する教育の成果がどの程度達成されているかについて評価し，特記すべき点を「優れた点」,「改善を要する点，問題点等」として示し，教育目的及び目標の達成の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

◇優れた点

①テュトーリアル１期生に対する臨床教官による評価によれば，従来の教育で育った学生に比して，知識量，問題解決能力，積極さなどにおいて優位性があり，教員への学生の質問が活発になったと示唆されており，学生が身につけた学力や育成された資質・能力の状況から判断して特に優れているといえる。

②平成１２年度は，６年間留年せずにテュトーリアル教育を受けてきた者は全員医師国家試験に合格した。まだ１回の実績であり，現時点で正確な評価は難しいが，導入前の学生の合格率に比べ高くなっていることは，今後期待される成果である。

◇改善を要する点・問題点等

①今後の動向を待って評価していく必要があるが，テュトーリアル教育の達成状況を判定する指標として，医師国家試験合格率や卒業率以外で判断できる方法,例えば,地域における医療への貢献度などから判断する方法などの検討が望まれる。

◇達成の状況（水準）

教育目的及び目標がおおむね達成されているが，改善の余地もある。

５．学生に対する支援

ここでは，対象組織における「学習や生活に関する環境」や「相談体制」の整備状況や「学生に対する支援」が適切に行われているかを評価し，特記すべき点を「特色ある取組，優れた点」,「改善を要する点，問題点等」として示し，教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

◇特色ある取組・優れた点

①学習や生活に関する環境について，学生が自習あるいはグループでの学習やレポートの作成ができるように，テュトーリアル室，情報処理演習室や図書館を，授業時間以外は昼夜学生に開放するなど学習環境の改善を積極的に行っている点は特に優れている。また，各テュトーリアル室には，コンピューター・図書・ホワイトボード等が設置してあり，常時使用可能である。

◇改善を要する点・問題点等

①学生の相談体制について，教務厚生委員長，教務主任，厚生主任に加えて複数の女性教官がキャンパスライフヘルパーの任に当たっているが，教官に相談を持ち込む学生は少ない。学生が心理的問題，学習上あるいは経済上の問題を相談しやすいシステム(体制)にする必要がある。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

６．教育の質の向上及び改善のためのシステム

ここでは，対象組織における教育活動等について，それらの状況や問題点を組織自身が把握するための「教育の質の向上及び改善のためのシステム」が整備され機能しているかについて評価し，特記すべき点を「特色ある取組，優れた点」,「改善を要する点，問題点等」として示し，システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

◇特色ある取組・優れた点

①教育の質の向上・改善，システムの整備・活用について，教育の質の向上・改善のために医学教育開発研究センター（ＭＥＤＣ）及び医学教育企画開発室がその任に当たっている。企画開発室は教務厚生委員会とも連携してテューター研修会を開催し，ＭＥＤＣは全国に向けて医学教育のための研修会をこれまでに数回開催してきた。ＭＥＤＣは平成１３年度に全国共同利用型で国内唯一岐阜大学に設置され，全国の大学医学部及び医科大学の教育の拠点として活動を行っている。この２つの機関の活動により教育の質の向上・改善が図られている点が特に優れている。

②医学教育企画開発室が学生によるテュトーリアルコースの評価を実施している。毎週コース終了時に評価のための用紙を学生に配布し，記入させて学務課に提出させている。評価用紙にはコースの内容評価及びテューターの評価欄を設けており，自由記載欄もある。

◇改善を要する点・問題点等

①テュトーリアルコースの評価結果をコース担当講座にフィードバックしているが，これに対する講座の対応はまちまちで，次年度のコース開講にどの程度反映されているかは明らかではなく，追跡調査が必要である。また，現時点では個々の教官の教育活動に関する評価システムが無く構築する必要がある。

◇機能の状況（水準）

向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。

Ⅳ　評価結果の概要

１．項目別評価の概要

この概要は，項目別評価結果の記述内容を要約したものであり，「特色ある取組・優れた点」，「改善を要する点・問題点等」及び「貢献（達成，機能）の状況（水準）」で示している。

１）アドミッション・ポリシー（学生受入方針）

◇特色ある取組・優れた点

①アドミッション・ポリシーとして，一貫した方針が策定されている。

②７項目にわたる受入学生の資質を「大学案内」など随所に明示し，オープンキャンパスなどにおいて，積極的に公表している。

◇改善を要する点・問題点等

①学外者にどの程度アドミッション・ポリシーが理解されているかを知るための手段を講じる。

②入学後の成績などによる追跡調査を行い，個々の入試の評価を進めることを検討する。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

２）教育内容面での取組

◇特色ある取組・優れた点

①全国の国立大学に先駆け，問題解決能力の開発を目指したテュトーリアル教育を実施している。

②授業の一貫として１年次及び５年次に合宿研修を実施している。

③プレゼンテーションや電子カルテの教育までを含めた医療情報教育を実施している。

④学外臨床実習を含め，クリニカルクラークシップ型の臨床実習に取組んでいる。

◇改善を要する点・問題点等

①教材の改良などにより，これまで力を注いできたテュトーリアル教育をより優れたものにする。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

３）教育方法及び成績評価面での取組

◇特色ある取組・優れた点

①テュトーリアル教育の授業ごとに一般目標，行動目標をシラバスに明示している。

②講義，実習・演習，自習を取り入れたテュトーリアル教育の実施している。

③テュトーリアル・コアタイムの出席状況を総括試験の受験資格とするなど，厳格な成績判定を行っている。

④臨床実習開始前に，マークシート方式の臨床実習資格総合判定試験を実施している。

⑤平成13年度の合宿研修で技能・態度教育の評価として，客観的臨床能力試験を実施した。

◇改善を要する点・問題点等

①学外臨床実習で各病院の医師による評価と学生の自己評価の結果を有効に活用する。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成に十分貢献している。

４）教育の達成状況

◇優れた点

①テュトーリアル１期生は，従来の教育で育った学生に比して，知識量，問題解決能力，積極さなどにおいて優位性がある示唆されている。

◇改善を要する点・問題点等

①テュトーリアル教育の達成状況を判定する指標を判断できる方法を検討する。

◇達成の状況（水準）

教育目的及び目標がおおむね達成されているが，改善の余地もある。

５）学生に対する支援

◇特色ある取組・優れた点

①テュトーリアル室，情報処理演習室や図書館を，授業時間以外は昼夜学生に開放している。

◇改善を要する点・問題点等

①学生の心理的問題，学習上あるいは経済上の問題を相談しやすいシステム(体制)にする。

◇貢献の状況（水準）

取組は教育目標の達成におおむね貢献しているが，改善の余地もある。

６）教育の質の向上及び改善のためのシステム

◇特色ある取組・優れた点

①教育の質の向上・改善のためのＭＥＤＣ及び医学教育企画開発室の活動。

◇改善を要する点・問題点等

①個々の教官の教育活動に関する評価システムを構築する。

◇機能の状況（水準）

向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが，改善の余地もある。